

〈報 告〉

## 東日本大震災を仏教的思惟から振り返る\*

三 友 量 順\*\*

はじめに

普遍性を有する宗教はいかなる教えであっても、人々の苦しみやかなしみ、或いは希求や願望さえも冷やかに突き放すことはない。どのような状況下にあっても、我々に感謝と深い反省をうながす思惟が、普遍宗教の根底に存在するのである。

生きとし生けるもののアルタ（役立ち）・ヒタ（幸せ・福祉）・スカ（安穩）を釈尊ゴータマ・ブツダは願い、大乘仏教はその精神を継承した。仏教は本来、人格の完成を目指す教えであり、それを実現したものが如来（タターガタ）と称された。

人々の苦しみに対して、仏教はどう応えられるのか。体験を同じくしなくとも、かなしみ(悲)・痛みからの慟哭や呻き、声なき声を感じることによって、皆がこころを同じくする。かなしみに触れてことばを発することも出来ない時がある。深いかなしみに対しては、無言(トウシューニー)が、こころを届けられる最上の方法であることもあるだろう。

本年(平成23, 2011年)3月に起きた東日本大震災に、多くの人々が止むにやまれぬ思いで、被災地に駆けつけた。そうした行動こそが、ことばを超えた思いやりであることを世界に伝えた。かれらの姿はまた、法華経に説く無数の「地涌のボサツ」<sup>1</sup>たちが、実在していることを感じさせるのである。

『人間の福祉』に寄せる論文や報告は、楽しく読んでもらいたいという思いが、本稿の筆者にはあった。しかし、時代・社会を共に生きる私たちは、苦しみも痛みも分かち合わなければならない。今号では、筆者は仏教文化を担当する教員の一人として、この度の震災に是非触れなければならないと思っている。筆者のおもいを披瀝し、東日本大震災を仏教的思惟から考えてみたい。

---

\*A *Buddhist perception of the East Japan great earthquake*

\*\*Ryojun MITOMO 立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：東日本大震災・仏教文化・地涌のボサツ

## I 震災・ともに悲しむ（アヌカンパー）

本年（平成23、2011年）3月11日に起きた東日本大震災は、日本のみならず、世界を震撼させるほどの衝撃を与えた。その日、本稿の筆者は午後から開かれた、東京の大崎キャンパス内にある、事務・法人棟2階〔斜面を活用した地下2階の構造で実際は4階ほどある〕での定例研究科長会議に出席していた。小休止を挟んで再開されるはずの続く会議を、数人の研究科長と立ち話をしながら部屋で待っていた。するとユックリではあるが大きく揺さぶられるほどの揺れを皆が感じた。やがてその揺れが尋常ではないことを悟った。横揺れは初め緩やかであったが、次第に建物全体を揺らし、立っている我々に大海原を揺れながら航海する船上にいるような錯覚を覚えさせた。

窓の外を見ると、大崎ニューシティにむかって建つ建築途中のビルが、隣接ビルに触れるかと思えるほど左右に揺れている。学生や教職員をはじめ、学内にいるすべてはキャンパス中央の広場に避難するように誘導があった。私を含めた2～3人は一度屋外に出たが、暫くしてから戻って部屋で待っていた。当日の会議が流会になるという報告が我々に届いた。三陸・東日本に甚大な被害が出たことがやがて知られた。

当日、筆者は、大田区にある私室から単車で大崎に来ていた。会議は流会となったが、ほとんどの都内の交通機関はマヒし不通となるような状態であった。次々と明らかになる被災地の惨状と、死者・行方不明者の数は、アビダルマ仏教に説く壊劫（物理的世界の壊滅期）<sup>2</sup>の始まりを思わせた。難を逃れ、避難した方々の家族たちの様々な状況が報道されるなかで、母親を亡くしたのであろう子供の様子は、心の底からの悲しみを感じさせた。その時のおもいを綴ったものがある。

### 【東日本大震災に涙しつつ

未曾有、こうした言葉を耳にしたのは遠い過去のような気がしていた。それが巨大地震・大災害という現実の出来事になった。阪神大震災から16年を経た本年（平成23年）3月11日、東日本を襲った巨大地震とそれに伴う津波の被害。それは多くの方々に、大地の底を裂くほどの傷痕をのこした。打ち続く余震、そして原子力発電所から流出する放射能汚染と、本震一月後の現在もその終焉の兆しが見えない。

当初3万人を超えるのではとも言われた死者・行方不明者の数。ひと月以上を経ても概算でしか表せないほど、被害は甚大である。

一人ひとりにかけてがない自分史があり、哲学がある。信仰があり、家族がある。そして故郷がある。お亡くなりになった方々の無念さ、ご家族のかなしみは如何ばかりであろう。深く低頭合掌して、わたしの最も身近ないのりの言葉を、心から唱えさせていただき、ご冥福をおいのりするばかりである。

命を失わないまでも、故郷を離れ、あるいは避難・転出をよぎなくされている方々の胸中も

如何ばかりだろうか。故郷は、あたたかな母の胸、厳しくやさしい父の背である。「やがてお迎えがくるのなら、故郷で死にたい」、そう避難所の老婦人は語る。

故郷を後にしなければならない若い方々、そして高齢者の方々にも、新しい第二の故郷が早く見つかりますように、そう願うばかりである。

母を失った小さな子どもが、祖母の携帯電話を借りて、もう電話に出ることのない母親にコールを送り続けているという。「アア、どうぞお願いします、その子がかけた電話に出てやって下さい。そして、「お母さんよ！」とやさしく子どもに伝えてやってください。それはすべての、子を持つ親の、涙溢れる心底のいのりである。

我々は日々、安逸を享受してきた。しかし、「我々」という表現は相応しくない。わが国における毎年の自殺者数は、三万人を超えている。かれらにも愛する家族・故郷があるだろう。その現実には、ほとんどの人々にとって他人事である。

だが、この大震災はまったく違う。他人事ではない。わが身におこることである。ならば、どう覚悟したらよいのか？ 人に覚悟を促すのではない。自分自身の覚悟である。

一生懸命に生き、愛語を語り、神仏・祖先を敬い、尊敬と感謝の日々を送る。それでも避けがたいことがおこる。もし災難に遭って、死ぬというときにも、「有り難うございました」と言おう。そして愛する家族には伝えておこう、「また、生まれ変わっても必ず家族になろう。」と。

〔4月19日 識〕

大勢のボランティアが現地に向かい、すこしでも役立とうとする彼らの姿に励まされた。筆者は宗教者として自分の出来る事をしたという気持ちから、連休が始まると直ちに、住居のある伊豆の国から独りで小さな車を駆って東北を訪れた。沿岸部の悲惨な様子は、津波の巨大な力をまざまざと感じさせた。到着したその日は、人影もなく迫り来る暗闇の中で、声の限り読経を続け亡くなった方々の冥福を祈った。

それ以来、仏教者の一人として、東日本大震災に遭われた方々のために何らかのメッセージを發し、それによって少しでもこころの支えになればと考えていた。大法輪閣編集部から本年7月、『大法輪』11月号への原稿依頼を受けた。依頼されたテーマは「苦しみからの解脱の道」である。今学期は授業も大幅に遅れた。8月8日の最終の試験（期末・中間試験）日を終えて、こころの思うままに率直な気持ちを表してみた。依頼された趣旨に直接応えたものではないが、その儘本稿にとどめておきたい。

【すべては消滅変化する存在であり、一時ももとの姿をとどめてはいない。そう理解できても、跡をとどめることのない故郷の惨状、愛する人々との死別はもっともやるせない悲しみである。

私たちは変わる事のない平穏な生活を求めている。しかし仏教の説く「諸行無常」の理は、世界あるいは地球全体に避けることのできない「共業」<sup>グワゴツ</sup>としてのものがあることを、改めて考えさせられる。

あらゆる出来事を実相として受け入れなければならない静的な姿勢も、ある時には必要であ

ろう。「悲しみによってやがてころの眼がひらく（常に悲感を懐き、ころ遂に醒悟せり）」と法華経は説いた。かなしみが癒されるのには時が必要である。

戦乱・抗争、核実験や自然破壊、そして号泣も嗚咽も、どのような痛みもかなしみも天地自然はしづかに吸収してくれてきた。その恩を忘れてはならないと思う。

仏教の法門（真理の章句）は、それぞれに受け取り方は異なる。どのような理解もどのような解釈も、やがてころの安穩が得られ、自他ともに傷つけることがなければ、諸仏は必ずよしとされると私は確信している。

形あるものはやがて滅びゆくものならば、たとえ実体としては把握できなくとも、姿形を超えた永遠なるものを人々は求める。美しいころに、正しい宗教により人々がころを寄せてきた。

初期仏教以来、人間のころが深く考察された。人の行いがころに促されるのなら、そのころを調えなければならない。わずかな不安でも人のころは動揺する。ころの動揺を静めることはたやすくはない。動揺に打ち勝つ、あるいは忘れるほどの楽しさがあるなら、人はそれに向かうこともあるだろう。しかし、それも一瞬の快感である。

感受するものはすべて苦しみであると仏教は説く。それが快感であろうと不快感であろうと。快感は一時の慰めであるから、人は永遠のころの安らぎを目指した。

そのこよなき安らぎは、他者に手を差し伸べる行為によって得られるものであることを大乘仏教は説いた。東日本大震災では、多くの方々が救援活動に参加した。これほど多くの地涌のボサツたちがいるのだということを、改めて我々に教えてくれた。仏教の説く行為（三業）には心身もことばも含まれる。世界全体が手を差し伸べてくれたことになる。

アビダルマ仏教の四劫説（成・住・壊・空）には、物理的世界の生成と滅亡の循環を説いている。やがてこの世界も戦乱や疾病・自然大災害などを経て消滅するという。現今の世界の諸情勢は、住劫の時代から壊劫（壊滅期）へと、間違いなく向かっていることを暗示するかのごとくである。まさに諸行無常である。

自然環境はそこに住む人々にとって大いなる母であり、偉大な父である。やさしさと厳しさをあわせ持っている。やさしさに甘えてきた。小さな子供にとって父母は不死なる存在である。やがて長ずるにつれて不死なる父母も死すべき存在であることに気づく。しかしその死は単なる消滅ではない。死は子供たちを覚醒させるための大いなる手段であると、法華経は説いた〔医子喩〕。

精神を継承することは、永遠のいのちを受け継ぐことになる。我々自身が、道元禪師のいう「一箇半箇」<sup>4</sup>として精神を接得し、継承する存在にならなければと真実そう思う。精神を継承することは生きかたを真似ることでもある。理想の人格を目指してその生きかたを真似る。中世のキリスト教修道士たちが理想とした「イミタチオネ・クリステイ（キリストのまねび）」<sup>5</sup>も同様である。

ボサツとして生きた方々を真似る。そこには仏教の普遍的な精神が根底になければならない。

言うまでもなく他者を思いやることである。批判においてもそれを欠いてはいけない。戒律のエピソードを伝える『毘尼母経』には、人を諫める際の五種の心得を述べている。・時を知り、・前人の利を考え、・実のところで、・調和語によって、・麤悪語をせず、がそれである<sup>6</sup>。

人類社会の福祉の実現に向かう普遍的な思想にこころを寄せる者は皆、相手を尊敬し・愛情をもってはじめて批判に意義のあることを知っている。

理想的な生きかたの一つには、責任を転嫁しないことも含まれるだろう。潔い生きかたである。この処で私達は生を受け、人生のよろこび悲しみを味わい、生を謳歌してきた。感謝することはあっても、決して怨んではいけない。あらゆることは自らがそれを受けなければならない。他人ごとではない。自業にせよ共業にせよ、避けられないものがある。そうならば、自らが信ずる信仰の核心（シラッター・サーラ）<sup>7</sup>をいだし、感謝の念をもって深く受けようと思っている。

中村久子（1897-1968）さんは、やがて『歎異抄』に出会い、手足も無く・見せ物小屋で生きてきた我が姿を真実ありがたいと振り返ることができたという<sup>8</sup>。どのような状態であっても、やがて人は有り難かったと人生を振り返るのだろう。正しい信仰ならば、その信仰が我々に教えてくれるはずである。

苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらいて、苦楽ともに思い合わせて、信仰を持ちつづけることの大切さを日蓮聖人は説いた<sup>9</sup>。苦しみは愛する人のために耐え、楽しみは惜しみなく分け与えてと、私は自分なりにそれを解釈している。

「サティヤ（真実）の把握（サティヤ・グラハ）」を強く説いたガンディーは、すべての自然に神聖を感じ取っていた。彼はサティヤを語根の「存在する（アス）」から解釈し、自然もあらゆるものも、存在するものは神に等しい素晴らしい存在であると感じていた。そして、神が彼を必要とするかぎり、どのような事が起きても決して死ぬ事はないと確信していた。ガンディーから彼の信ずる宗教を奪わないかぎり、彼を殺すことは出来ないとも語っている<sup>10</sup>。

我々も、自ら信ずる正しい宗教心を失わないかぎり、肉体は滅んでも精神は死ぬことはない。肉体はながらえても、正しいこころを失ってしまったら、ガンディーの言う真実の把握は不可能であろう。

「あらゆるものの本性（プラクリティ）は、常に光り輝けるものである」と大乘經典は説く〔法華経・方便品102偈〕。自然も、亡くなったどの方々も、一つひとつ、一人ひとりみな光り輝いている。その光は我々の心の苦しみを解放してくれる。そう確信するのである。】

## II 大震災と仏教的思惟

数日を経て、『大法輪』からの依頼の趣旨を確認し原稿を書いた。内容は、上述のものと重複する部分もある。一般読者層を考慮し、編集部・谷村氏からの「出来れば幾つかのキーワードをまじえて」という当初の要望を考慮したものである。『大法輪』11月号は本稿の載る『人

間の福祉』の発刊には先立つ。但し、筆者の拙稿ではあっても谷村氏の了解を得たうえで草稿をそのまま以下で紹介してみたい。

## 【「苦しみからの解脱の道」

### 〔四種の真理（四諦）と解脱〕

争いの無い人類社会の本当の幸せ（福祉）を願い、その実現に私たちを向かわせる、そうした教えが真の普遍性を有します。仏教は世界宗教のなかでも、特にその意味での普遍性を初めから有していました。仏教はまた、苦しみからの解脱の道を説くと言われていました。私たちは様々な苦しみのなかに生きています。その苦しみからの解脱とは、一体どういうことなのでしょう。

インド一般に、宗教的な理想の境地を表すことばがモークシャ（解脱）です。このことばは仏教のさとりととも同義語です。このモークシャを、インド独立の父マハトマ・ガンディー（1869-1948）は、「謙虚さ」のことであるとみなしていました<sup>11</sup>。苦しみやかなしみは、それを謙虚に受け入れる、それも一つの苦からの解脱かもしれません。

苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらいて、苦楽ともに思いあわせて、信仰をたもち、正しく生きるべきことを、鎌倉時代の日蓮聖人は説いています。

苦をさとる・楽をひらくというこのことばは、私は次のように受け取っています。「苦しみはジッと耐え、楽しさ・嬉しさは広く施与して」というように。

仏教には四諦（苦・集・滅・道）の教えがあります。苦しみの生ずる原因、そしてそれを滅する実践道として八種の正しい道（八正道）があることを示してくれています。

四諦の諦（サティヤ）は「真理」と訳されますが、サティヤには現実・誠実などの意味もあります。ガンディーはこのことばを、サンスクリットの語根（アス、存在・実在する）にさかのぼって、その意味を「現実（真実）の存在」と受け取っています。現実の・存在、それが真実であり、光り輝く神聖なものであると彼は見ていました。

サティヤは、しばしば大乘經典には「<sup>じょうたい</sup>誠諦」とも漢訳されていることばです。誠諦は「まこと」と訓じることもできます。

「仏教の精神は、和語のまこと、ということばでも表現されます」、中村元（1912-1999）士が、そう語ってくださったことを懐かしく思い起こします。まことは、人の志において欠くことのできない「真実（真理）」です。

まことと訓じる漢字が、漢和辞典には幾つもでています。それらを見ると、正しい信仰をもって生きる人の姿が浮かび上がってきます。「いつわることなく（真・誠）、人をゆるし（允）、自らには厳しく（信＝もとの意味は言行一致です）、物事を正しく判断でき（諦）、偏ることなく（衷）、思いやりのこころ・まごころ（情・実）がある。」。そして「こころ楽しく（款）、明るく（亮）生きる」。わずか三文字の和語にはこれだけの意味が含まれています。

〔八正道によって〕

「道」と漢訳された、もとのことばの一つがマールガ（ヒンディー語のマールグは道路の意味）です。道路は、いかにすばらしい道であっても、実際に人が利用しなければ何にもなりません。八正道の「道」の原語が、このマールガなのです。

八正道の実践を「中道」と仏教をとらえました。この「中道」という時の「道」はマールガではなくプラティパドとなっています。それは「前に（～の方向へ）行く」という意味があります。中道ということばは、まさに八正道の実践を表しています。

仏教のことばは、人生の深い考察にもとづいていることを実感させます。八正道（正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）のそれぞれには、すべて正しい（サムヤク三藐）ということばが付されています。精進や努力なら何でもよいというわけではありません。正しい精進努力（正精進）であって、はじめて人類社会の福祉の実現が可能となるからです。

見解も思惟もそうです。正しい見解（正見）・正しい思惟（正思）であるのかどうかの間われなければなりません。生活面においても、正しい生活（正命）とは何かを、このたびの東日本の大震災が我々に気づきを与えてくれています。「正さ」は、「他者のためをはかり」、自他ともに傷つけることがない「よき心（善）」と、私は理解しています。

さとり（菩提）ということばには本来「正さ」は不要に思えますが、そうではなさそうです。仏典には三藐三菩提（サムヤク・サンボーディ正等覚）というように、さとり（菩提）にも、このサムヤク（三藐）が付されています。さとりや気づきも正しい「よき心」が必要になるのでしょうか。

「この地球は、私たちが本当に必要としているもの（ニーズ、単数）を惜しみなく与えてくれる。しかし、私たちのグリード（貪欲）を満たすようなことはしてくれない。」。ガンディーのこのことばを、経済思想家E・シューマッハ（1911-1977）が彼の著『スモール・イズ・ビューティフル』に引用しています<sup>12</sup>。

ニーズ（複数）ではなく、本当に必要なもの（ニーズ）が何なのかを真剣に考えなければなりません。我々がしばしば口にするニーズ（必要なもの）は、えてしてグリード（強欲）ではないのかという反省を、ガンディーのことばが促しています。

〔四無量心と四摂法（四摂事）〕

大乘仏教では、はかりしれない四種の利他の心（四無量心）を説きます。慈・悲・喜・捨の四種の無量心がそれです。慈悲が仏道の根本であることは、大乘の論書『大智度論』にも述べるところです。慈と悲、それぞれの原語とされるマイत्री（いつくしみ・真実の友情）とカルナー（あわれみ・同情）は、「与楽」「拔苦」に配されることがあります。慈無量ははかりしれない「与楽」の心であり、悲無量ははかりしれない「拔苦」の心であるといえます。

慈悲という仏教語は、愛憎の対立を超えた純粹の愛を意味することばです。ただし、具体的に慈悲とはどういうものかということになると、たいへん抽象的なことばでもあります。イン

ド一般には、慈悲に相当する語にアヌカンパー（愍・憐愍）があります。もとの意味は人々の悲しみや痛みに触れて身体が震えるという意味のようです。このアヌカンパーの語は大乗經典にもしばしば見られます。身体が震えるほどのかなしみ、それを体験して初めて慈悲に気づくことができるのかもしれませんが。

喜（ムディター）無量は、他者のしあわせを喜び、妬ねたむことのない無量の心をいいます。喜と訳された原語のムディター（語根はムド・喜ぶ）は、「随喜」と訳されるアヌ・モーダナーともルート（語根）は同じです。随喜は「ともに喜ぶ」という意味があります。

社会における共生の要件として、私は、「ともに喜び（アヌモーダナー）」「ともに悲しみ（アヌカンパー）」「ともに分かち合い（協力）」「ともにたまわる（食べる）」ことを挙げています。「ともにたまわる（食べる）」という「食の共同」の大切なことは中村元博士の著書から<sup>13</sup>、「ともに（仕事を）分かち合う」という表現は、絵本作家でガーデナー（園芸家）でもあったターシャ・チューダ（1915-2008）さんの本から学びました<sup>14</sup>。「ともに分かち合う（協力・共同）」ことは、仏教の四摂法でいう「同事」に他なりません。

捨（ウペークシャー）無量は、平らかな心で平等に人を利する心が無量であることをいいます。原語のウペークシャーには「無頓着」の意味がありますが、仏典では寛大な心を表現することばです。捨はまた喜捨として、喜んで財を捨てるというようにも解釈されました。喜んで施しをする、それは誰にでもできることではありません。最近、次のような事例を知りました。

さるクリニックの待合室で、週刊誌を見ていました。ソフトバンク孫正義氏の評伝を書いている方の小さなコラムに目がとまりました。彼は正義氏に対して、社会貢献の点でいささかの苦言（？）を呈したようです。すると、それを知った正義氏の父三憲氏から、彼にお礼のことばが届いたというのです。

これが誘因となったのかどうかはわかりませんが、東日本大震災後、孫正義氏が直ちに巨額の援助を申し出たことは周知の通りです。わが子に向けられた苦言に、親が感謝の気持ちをもつということは素晴らしい事だと思います。その苦言を実際に子供が社会に活かすということになればなおさらです。資生の業（あらゆる事業）はみな正法に順ずる<sup>15</sup>という大乗仏教の精神を感じずにはおれませんでした。

施し（布施）も四摂法（事）の一つです。布施・愛語・利行・同事は、仏道の実践に欠くことのできない四種の徳目です。おそれ・苦しみ、そうしたものを少しでもやわらげるために四摂法の実践があります。利他（他利）がすなわち自利でもあることは仏教の説くところです。四摂法は、自らのおそれ・苦しみをやわらげるための、仏道実践と受け取ることもできましよう。

観音さまを施無畏者（無畏を施す者）とも称します。「マー・アバヤ（畏れること・怖がることは無い）」という励ましのことばが經典に登場しています。苦難の際には、そうした励ましのことばはどれほど人々を勇気づけてくれることでしょうか。宮澤賢治の詩「雨二モマケズ」にも、施無畏は「コハガラナクテモイ、」ということばで出てきます。

慈悲にもとづくことば（愛語）には、人の運命を転ずるほどの力があることを、道元禪師は、「愛語よく、回天の力あることを学すべきなり」<sup>16</sup>と説示されました。

「おそれること・怖がることはない、私たちを励ましてくれるこの愛語が天地に遍満している、そう私は感じています。】

### Ⅲ 世間の相は常住なり

仏教で説く真理の旗印（法印）の一つが「諸行無常」である。万物は生滅変化し、瞬時ももとの姿を留めることはない。あらゆる事象は移り行くものである。しかし生滅変化するものに不変なる神聖を感じ、感謝と反省のこころをいただき、社会に貢献（奉仕）することは仏教のみならず、すべての普遍宗教の教えである。

敬虔なヒンドゥー教徒であったガンディーは、様々な自然に神聖を感じていた。自然（神）は、常に寛大であり最も偉大な民主主義者（the greatest democrat）であるとも彼は言う。その偉大な民主主義者は我々に「足枷なく自由に自分自身で善悪の判断が選択が出来る」ようにしてくれていると言う。神は沈黙し忍耐深いけれども、ある時には人間を容赦しない（terrible）とガンディーは述べている<sup>17</sup>。

容赦しない対象としての人間には、個としての自身も除かれていない。仏教の共業からみれば、業（行為）の応報として結果は、すべての人間がひとしく受けなければならないからである。

すべての存在はひかり輝けるものである、という理解は初期大乘経典『法華経』にも見られた。「諸法はもとよりこのかた、常に自ら寂滅の相なり」と羅什訳法華経（『妙法蓮華経』）には訳出されている<sup>18</sup>。

あらゆるものは本来、動揺や変化を受けることはなく、常に清浄なすがたのままであると見ることの出来るのは、我々の眼から見た世界ではない。もろもろのブツダたちの目からみた三界（欲界・色界・無色界）は、生ずることも滅することも揺らぐこともないと言うのである<sup>19</sup>。

「衆生、劫尽きて、大火に焼かると見る時も、我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり」〔法華経・如来寿量品11偈〕と仏典は述べる。この世界が劫火によって焼き尽くされると衆生たちが感じる時でも、ブツダの国土（浄土）は神々や人間で満たされた安穩なる世界であると法華経は説いた。

その世界が実感できるのは「柔和で質直（おだやかでmṛdu, やさしいmārdava）」な衆生たちであるという〔如来寿量品16偈〕。彼らが、原語表現を超えた真理（ダルマ）の理解者であるボサツであることを法華経・方便品は説いた<sup>20</sup>。

諸仏は、衆生たちすべてが「清浄」なる存在となって欲しいと願ってこの世に出現したと言う。筆者は、『妙法蓮華経』方便品に表れている清浄なる彼ら大乘のボサツの姿を論じたことがある<sup>21</sup>。そこから結論として、その「清浄」性は次のようなものに要約された。

「ところが浄く（心浄）・やさしく穏やかで（柔軟・柔和・質直）・明晰で（利根）・利他の請願を懐き（深心念仏）・六波羅蜜を實踐し（修持浄戒）・信仰の核心を得（śraddhā-sāra 貞実）・慢心（abhimāna 増上慢）が無く・恥じるころ（lajji 慚慙）がある。」

彼らは過去世にも諸仏に会い、そのもとで仏道の実践していたとも述べられている。八正道は仏教の説く、両極端を離れた中道の実践であり、苦かの解脱の道である。そして六波羅蜜は大乗仏教における重要な実践の徳目である。

過去世において諸々のブツダに会っているということは、いのちが今生限りのものではないことを我々に伝えようとしている。姿形は滅んでも（諸行無常）、他者の幸せ（ヒタ）を願って生きたすべての人々のいのりは必ず継承されるのだろう。

初期仏典には、究極の理想（さとり）に達した者の姿が述べられている。それはさとりを得た者、すなわちブツダの姿と理解してよいと思うのである。

「究極の理想に通じた人が、この平安な境地に達してなすべきことは次の通りである。能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者であらねばならぬ。」  
〔『スッタニパータ』143 偈・中村 元博士訳、岩波文庫〕

先に紹介した法華経における浄らかなボサツたちの姿に、この初期仏典のことばは重ね合わせることによって、仏教は、何等特殊な教えを説くものではないことが理解できよう。

その姿は普遍宗教の説く理想の人間像である。清浄性を有する者が、大乗仏教のボサツの姿であるとすれば、その清浄性を獲得すべく歩まなければならない。そして、「我が此土は安穩にして、天人常充滿せり」というブツダの国土（浄土）を、如何なる状況にあっても安立しなければならぬ。その魁として、法華経には「地涌のボサツ」が登場し、鎌倉時代の日蓮聖人は自らをその上首（リーダー）の一人である上行ボサツの再誕と任じた。

かれら上首の四ボサツたちは、名前にすべてチャーリトラ（語根は√car 実行する）が付せられている。理法の継承はその実践にあることを示しているのである。

時代の濁乱（劫濁）には必ず、理法（ダルマ）の継承者たちが出現する。初期大乗経典の法華経はそう説いている。法華経「從地涌出品」に登場する「地涌のボサツ」たちもそうである。東日本大震災では、多くの無名の奉仕活動者たちが現れた。現代という時代の濁乱期に現れた「地涌のボサツ」たちである、そう筆者は、東日本大震災を仏教的思惟から思うのである。

## まとめにかえて

災害にたいする備え・防災は大切なことである。しかし計り知れない自然の力の前に防ぎえないものもあるだろう。そうした時に静かな姿勢を採ることは、決して悲観的（厭世的）な人生観を促すものではない。その静かな姿勢は、やがて未来への希望を育む能動的な大きな力となると思っている。江戸時代の禅僧・良寛（1758-1831）が、当時の三条地震で山田杜臯によせた励ましの手紙が知られている<sup>22</sup>。諦観的な良寛のことばは、決して被災者を冷たくあしら

うものではない。

自らの三業（身・口・意の行為）を淨らかに調え、思いやりのところをもって正しく生きる。そうした人々のうえにも、自然災害は容赦なく襲いかかることがあるだろう。もし、そうした時には、我々の命や・築き上げたものすべてを、（失うのではなく）もとに戻さなければならぬ。仏教の無我説や空の思想から見れば、本来、我がものとして執すべきものは何一つないからである。

「感謝と尊敬の気持ちを失わず、災害にも備え、一生懸命に生きてきて、それでも災難に遭うこともありましよう。その時には災難を受け入れる他はありません。そして死ぬという時が来たら、死も受け入れる他はないのです。そう覚悟することが、災難に捕らわれずに前向きに生きる妙法だと思っています」。良寛の手紙を、筆者はそのように読んでいる。

仏教の諦観は、実相をあきらめる（明らかにする）ことをいう。諦めることによって、自らが歩むべき人生は意義あるものとなるからである。悔いなく生きるためにもあきらめることが大事である。諦めることによる静的で、ある時には受動的な姿勢は我々に深い内省を促す。内省は未来にむけて希望を実現する積極的な力を発揮させるのである。

共生の要件として、筆者は「共に喜び（アヌモーダナー）」「共にかなしみ（アヌカンパー）」「共にたまわり（食べる）」「共に分かち合う」を挙げた。共生のために、痛みも喜びも、仕事も分かち合わなければならない。東日本大震災にともなって発生した原子力発電所の事故・放射能汚染、今後予想される甚大な被害などが国内外に大きく報道されている。現地の復興対策・家族のみならず仕事を失った多くの方々のこれからの安定した生活、課題はまさに山積している。

そのなかで、仏教的思惟から東日本大震災を振り返ると、物の豊かさが人間の幸せであるとした唯物的価値観から、あらゆる方面で人々が脱却しなければならないだろう。そして釈尊ゴタマ・仏陀が願った「生きとし生けるもの（プラーニン）のアルタ（役立ち）・ヒタ（幸せ）・スカ（安穩）」の実現には何が必要なのかを問い直さなければならない。我々の「こよなき幸せ（マハーマンガラ）」が何かを、初期仏典はブッダのことばとして伝えている。

父母につかえること、妻子を愛し護ること、仕事に秩序あり混乱せぬこと、——これがこよなき幸せである。〔『スッタニパータ』262偈、中村 元博士訳〕

尊敬と謙遜と感謝と満足と（適当な）時に教えを聞くこと、——これがこよなき幸せである。〔同26偈〕

こよなき幸せ（マハーマンガラ）は、手の届かないものではない。日常のつましい生活にこよなき幸せが溢れている。ガンディーが言う本当に必要なもの（need単数）は何だったのかを、東日本大震災は我々に問いかけている。

家族や家屋を、そして仕事を失いながら、現地で復興にむけて全力で取り組んでいる方々は多い。そうした多くの方々には、かなしみや感傷にひたる余裕はないだろう。そして実際には被災しない者たちにも、PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しみ未だ立ち直れない方々は

多い。何かのために、誰かのために生きる、そういった気持ちを是非もってもらいたい。

未来の子供たちに、こよなき幸せを感じさせるために、精一杯出来るだけのことをしておくことは我々の義務だからである。

注

- 1 『法華経』従地涌出品に登場する、仏滅後に法華経の弘通のために大地から涌出した無数のボサツ。彼らは久遠の昔から本仏としての積尊に教化されていたという。彼らの上首（リーダー）が上行・無辺行・淨行・安立行の四ボサツ。日蓮聖人は自ら上行菩薩の再誕としての自覚を懐いていた。
- 2 仏教の四劫説に関しては、わかりやすいものとして『現代に生きる仏教－仏教文化の視点－』（東京書籍）第6章「アビタルの宇宙と人間」（pp.171-198）が参考になる。
- 3 すべての人々に共通して現れる業。業（カルマ）は本来「行為」の意であるが、その行為によって生ずる結果（果報）も含めてゴウと称している。個人の力を超えた共同の業力による結果も等しく受けなければならないと考えられている。
- 4 禪の用語として『碧巖録』『景德伝統録』（TZ.51,445a）などに示される。たった一人もしくは半人であつても意。
- 5 *The Imitation of Christ*, translated by Ronald Knox and Michael Oakley, New York.1959. 邦訳には池谷敏夫『キリストにならいて』（信教出版社、1987年）がある。格調高い和訳である。
- 6 拙著『毘尼母経』（新国訳大蔵経、律部（10）、大蔵出版、2005年）pp.49-50参照。
- 7 śraddhā-sāra（信仰の確信）の語は。法華経・方便品サンスクリット・テキストに出る（Kn,p.39.14）。無価値なもの・粗穀の如きもの達が退出した後に残った者たちの姿。
- 8 中村久子氏の生前の姿がYou Tube動画で見ることが出来る。『中村久子こころの日記』（春秋社、2010年）ほか参照。
- 9 「四条金吾殿御返事（建治二年六月二十六日付け）」〔昭和定本219〕には、「苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらき、苦楽ともに思合て、南無妙法蓮華経とうちとなへるさせ給へ」とある。『平成新修日蓮聖人遺文集』（平成6年、出雲・連紹寺）には本抄は収録していない。日蓮聖人遺文中の、真蹟現存（完存・断片）・真蹟曾存のものに限った収録としているからである。真蹟遺文にもづく教学・研究も大切であるが、それによってこれまで聖人遺文と仰がれ、人々の心の支えとなってきた「ご妙判・ご遺文」を軽視するような傾きがあつてはならない。聖人遺文に対しても、普遍思想的な解釈をもつてしなければならないだろう。普遍性のある思惟や精神を問うべきであつて、そうでなければ明治期の大乘非仏説論にあつた如く、根本精神を置き去りにした真偽成立論に終始してしまう恐れがある。
- 10 拙論「M・ガンディーの宗教観に見られる普遍思想－My Religionを通して－」（中澤浩祐博士古希記念論文集『インド仏教史仏教学論叢』平成23年2月、平楽寺）pp.49-75。
- 11 *My Religion*, compiled and edited by Bharatan Kumarappa, Navajivan Publishing House (1955年), p.57, ll.33-35.
- 12 Ernst Schumacher, *Small is BeautifulL: A Study of Economics as if People Mattered*, London 1973, p.24.
- 13 中村 元『原始仏教の生活』NHK ブックス, p.140
- 14 ターシャ・テューダ女史の絵本とことばは日本にも多くのファンがいる。自然をこよなく愛し、寒い冬に大きなフクシアの鉢を戸外から室内へと運ぶ様子がテレビで放映されたことがある。

Tasha Tudor & Family, Inc., and MEDIA FACTORY, INC. から多くの彼女の作品が出版されており、邦訳もある。推薦したいものは多いが、3点ほど紹介したい。『生きていることを楽しんで』『今がいちばんいい時よ』『ターシャ・テューダーの世界』。

- 15 法華経「法師功德品第十七」大正新脩大藏経 (Tz). 9 卷, 50a.
- 16 岩波文庫本『正法眼蔵 (四)』「菩提薩埵四摂法」 p.424.
- 17 *My Religion*, op. cit. p.39, ll.16-17.
- 18 方便品のサンスクリット本には、「実にこのダルマ (真理) の導き (netri) は常に存在し、もろもろの存在の (dharma) の本性 (prakṛti) はひかり輝けるもの (prabhāsvarā) である。」という。WT本. p.51, ll, 14-17.
- 19 法華経「如来寿量品第十六」 Tz. 9 卷, 42c15. WT本. p.271, ll, 7-10.
- 20 拙論「仏伝 (梵天勧請) の大乘的展開」 [塚本啓祥教授還暦記念論集『知の邂逅 - 仏教と科学』, 平成5年, 佼成出版社] pp.567-582.
- 21 四天王寺管長・奥田聖應博士の記念論集 [未刊] に拙論「一乗思想とボサツの清浄性」を寄せた。
- 22 山田杜臯に宛てた良寛自筆の手紙が残っている。作家・水上勉の『良寛』(中公文庫) によっても広く知られた。「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是ハこれ災難をのがるる妙法にて候」。